

〔書評〕

関根達人・菊池勇夫・手塚薫・北原モコツトウナシ編

『アイヌ文化史辞典』

今石みぎわ

本書『アイヌ文化史辞典』は、「近年、独自の文化を持つ先住民族として注目されるアイヌ文化について記述した」という「初めての総合辞典」である（吉川弘文館ホームページ）。「ひと」「もの」「こころ」の三部構成で、「ひと」は主に考古・歴史分野を扱い、「もの」は物質文化、「こころ」は精神文化について、約一〇〇〇項目が収録されている。

アイヌ民族をとりまく現状は、近年ひとつの変換点を迎えている。民間においては、二〇一四年から『週刊ヤングジャンプ』に連載がはじまった『ゴールデンカムイ』（野田サトル作）が人気を博し、そこに描かれたアイヌ文化が、素直に「カッコいいもの」「魅力的なもの」として若い世代の関心を集めたことが大きかった。二〇一九年にはアイヌを「先住民族」と明記したいわゆるアイヌ新法が定められ、二〇二〇年にはウポポイと通称される「民族共生象徴空間」が白老町に設けられ、国立アイヌ民族博物館も開館となった。残念ながら評者はまだ同館を訪問できていないが、ホームページを見るとウポポイ設置の理念として「アイヌ文化を振興するため」だけでなく「我が国の貴重な文化でありながら存立の危機にあるアイヌ文化を復興・発展させる拠点として、また、将来に向けて先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を

持つ活力ある社会を築いていくための象徴」になることを目指すものと謳われている（傍点筆者）。

これらの動きは、これまでの「アイヌ像」——文化剝奪や人権侵害といった苦難の歴史の、みを強調し「歴史的に虐げられた人々」と刻印することや、逆に「自然と共生する人々」といった「善意」の祀りあげによって作られた虚像——から一歩進んで、アイヌの歴史・文化の実態をより正確に理解しようとする機運を高めたと言つてよい。さらには、失われた過去のものとしてアイヌ文化を捉えるのではなく、現代を生きるアイヌの人々が日々再創造・再構築する、「生きたアイヌ文化」というものを肯定し、支援していこうという意識の醸成や、関連する様々な取り組みにも繋がってきたように思われる。

こうした時代の流れのなかで、専門家だけでなく、アイヌ文化についてもっと詳しく知りたいという一般の人が気軽に手にとることのできる総合辞典ができたことは大いに歓迎すべきことである。本書は図版も約二〇〇点と多く、何かを知りたい時に参照するだけでなく、パラパラとめくって眺めているだけでもおもしろい。より詳しく知りたい人は各項目の最後に提示された参考文献からさらに探求を深めることもできるようになっており、入門書としても適している。

本書はまた、「樺太、千島、北海道、本州にまたがるアイヌ文化の多様性を重視し」（総説）、ひとつの項目の中で、できるだけ広い地域の言葉や事例を拾うようにしているのも特徴であり、それが、本書が「総合辞典」であることを標榜する根拠のひとつであろう。和人の文化において顕著な地域性や方言があるように、これまでひとくくりに捉えられて

きたアイヌ文化にも当然、多様性がある。例えば北原モコットウナシ氏は、アイヌの祭具であるイナウの研究史においては、「北海道の日高西部沙流川流域のイナウを代表として示すことが多く、同地域に限って見られる局所的な現象を一般化してとらえる認識を生んだ」という課題があったことを指摘している（北原次郎太『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道大学出版会、二〇一四年）。これはイナウ研究にとどまらず、アイヌ文化研究全体が抱える問題であったと考えられ、本書が「アイヌ文化も多様である」という、いわば当たり前の事実・メッセージを、具体的事例とともに提示することの意義は大きい。本書はこれまで漠としたイメージで語られることの多かったアイヌ像を解体・再構築し、より鮮明化された具体像を描き出すのに一役買うに違いない。

さて、本書を一読して感じるのは、この本がいろいろな意味でアイヌ民族の現在の立ち位置を反映しているという点である。

例えば、「アイヌ」という項目が立てられているということもそのひとつである。仮にいま、『日本文化事典』といったような本が日本語で著わされるとして、そこに「日本人」という項目が含まれることがあるだろうか。おそらくないであろう。それは読み手にとってあまりにも自明のことだからである。しかし本書には、民族としてのアイヌに係する項目として、「北海道のアイヌ」「樺太のアイヌ」「千島のアイヌ」「本州のアイヌ」「近世のアイヌ」「現代のアイヌ」と、複数の項目が立てられている。本書で指摘されているとおり、アイヌ民族の居住領域が広大で、「自然環境や日本製品の流通環境の違いを反映し、衣食住の地域差

も著しい」（三三四項）ことを考慮していることはもちろんだとしても、一方で、その文化や民族としてのありようが時代によって激変し、民族が寄って立つべき根幹の多くが失われていった苦難な歴史を如実に語るものでもある。何より総説でも触れられているように、アイヌの人々自身が、「真正なアイヌ文化」と「同化したアイヌ」文化の間で、あるいは「日本社会の市民」と「アイヌ民族」の間で二重のアイデンティティに悩み、「アイヌとは何か」を自問してきた歴史の反映でもあるだろう。さらに、これほど「課題」が語られる辞典も少ないように思う。例えば「現在も重要な課題の一つ」となっている「学校教育における差別」（八頁）や、「未決の課題」（一〇頁）が残されたままのアイヌ新法のように、主に和人との歴史的軋轢に根付いた課題が数多く指摘されている。また、アシリチップノミなどの儀礼を現代において実践するにあたっての課題（二二頁）や、文化復興の動きの中で文化の画一化が進んだり、ジェンダー規範をめぐる葛藤が起こっていることなど（六二五頁）、より今日的な課題もある。

研究上の「課題」も率直に述べられている。例えばイナウなどに記される「刻印」については「不明な点が多く、資料に即した歴史的な実態の解明が待たれる」（三八八頁）ことや、あるいは「アイヌ文様」の項もおもしろい。アイヌ文様にはしばしば魔除けの意味合いがあると説明されるが、アイヌ民族自身がそのように説明した証拠はほぼなく、一九六〇年代以降の出版物に魔除け説が記述されたことで普及していったらしいこと、しかし現在では多くの作り手がその説に則り、魔除けであると説明していることなどがコンパクトに記述されている（三二六頁）。

ところで本書には一〇〇名近い執筆者が関わっており、そのことはとりもなおさず、こうした総合辞典が編めるだけの研究蓄積がなされ、また研究者層がぶあつくなってきたことを示すものであろう。一方で、分野ごとの研究状況に偏りがあるのも事実である。例えば「こころ」の章は、二〇〇以上ある項目のうち、その七割以上を北原モコットウナシ氏が、二割以上を矢崎春菜氏が執筆しており、全体の九割以上が二名の研究者によって執筆されている。もちろん両氏がこの分野の優れた先達であることは論を俟たないが、第一章である「ひと」の分野に比べて、「こころ」の分野を専門とする研究者が少ないこともまた事実で、そんな研究史上の課題も本書からは透けてみえる。

そうしたたくさんの「課題」の一方、随所に、アイヌ文化の再構築に向けた現在進行形の取り組みが書き込まれているところも、本書のおもしろい点である。例えば「板綴じ舟」について、「近年では数隻のイタオマチブが復元され、技術の復興が試みられている」ことや(三三五頁)、白老町や平取町で樹皮衣(アットウシ)の材料確保を目的にオヒョウの苗木を養成する取り組みが行われていること(三四九頁)等々。こうして本書は、単に歴史的・文化的な過去の事実を並べるだけでなく、アイヌ民族の「いま」を映し出そうとしていると言つてよい。いま、文化がどのように復興されようとしているのか、二〇二二年現在のアイヌ民族やアイヌ文化をめぐる状況、あるいは空気感といったものを後世に伝えるためにも、本書は役に立つのではないかと思われる。

さて、評者はいわゆる和人の民俗文化について、これまで東北地方を

中心的なフィールドのひとつとして研究を行ってきたが、その評者にとって本書で特に関心のある分野が、「もの」の章で取り扱っている物質文化やそれに伴う技術である。東北地方の民俗文化と、特に北海道アイヌの文化には、自然環境や地理的な近接性に基づく共通性が多く見られ、具体的な比較対象として大変おもしろいからである。

例えば樹皮の内皮を利用する技術は、アイヌと和人が共通して持つ文化のひとつである。本州以南で最も広く利用されたのはシナノキであるが、ほかにもフジ、コウゾ、クズ、ケヤキ、スギなど多種多様な樹種の内皮が利用されてきた。しかし、アイヌ文化であれば多用されるオヒョウについては、本州以南の和人文化においてはまったく見られない。植生だけを見れば、オヒョウは九州まで分布することになっているにもかかわらず、なぜ本州以南では利用されてこなかったのか。しかも近世以降、北東北においてはアットウシが和人にもかなり広く受け入れられ、その機能性や質感が高く評価されてきたにもかかわらず、である。本州以南でオヒョウが利用されない文化的・生態学的背景は評者の素朴なる疑問なのであるが、このことを考えるためには、アイヌ文化においてオヒョウが他の内皮利用とどう違っているのか——採取・加工技術や物質的特徴、生態に関する知識や認識がどのように違うのか——を知ることがひとつのヒントになる。こうした具体的に詳細な物質文化研究も、今後のアイヌ文化研究においてより深めていってもらえれば、近接分野を研究する者として大変ありがたいと感じる。

また、物質文化研究のもうひとつのおもしろい側面として、文化交流史の中での影響関係がある。アイヌと和人の文化の中にはお互いに影響

を与えあったものが少なくないが、これまでも和人からアイヌへ、という文化の流れはしばしば示されても、アイヌから和人へ影響を与えた物質文化・精神文化というものについては多くが語られることはなかったように思う。本書のなかでは、例えば「丸小屋」が「アイヌ文化が和人社会に影響を与えた一例」として挙げられている（四六三項）が、こうした北からの文化の流れが、見落とされているだけで実はもっとたくさんあったと思われるのである。アットウシや、舟の推進具である車くるまが櫂かいの和人による利用なども一例であろうが、本書にそうした言及がないのは少し残念である（車櫂については単独での立項がない）。日本列島上交差する多様な文化の道が明らかになるのは、アイヌ文化研究にとってだけでなく、和人の文化研究にとってもきわめて大切なことである。今後の研究に大いに期待したい。

ところで、率直な疑問として、本書をなぜ「事典」とせずに「辞典」としたのか、少し気にかかっている。「事典」は特定の事柄に関する知識や情報などの内容をまとめたもの、「辞典」は言葉についての読み方や意味を解説したものとするれば、本書には「事典」という言葉遣いのほうがしっくりくるように思われるからだ。そこに何か意図があったのか、あるいは何か今後の展開を考えておられるのか、いつか機会があったら編者の方々に聞いてみたいように思う。

（菊判、七〇八頁、吉川弘文館、二〇二二年六月二七日発行、本体価格一四〇〇〇円＋税）

（いまいし・みぎわ 東京文化財研究所無形文化遺産部主任研究員）